

JTAトピックス 2018年3月

日本テコンドー協会入門から10年継続

伊藤岳陽 (名古屋天白跆拳道クラブ、元愛知大府跆拳道クラブ)

国立・愛知教育大学 (第一志望) 現役合格！

日本テコンドー協会 (JTA) の七大精神の一つ、「我々は文武両道を志すこと」。
小学3年生で、愛知大府テコンドークラブに入門し、
10年間、稲熊肇クラブ長および辻陽介クラブ長の指導を受けてきた伊藤岳陽が、
愛知県教育界を支えている国立・愛知教育大学に現役合格しました。

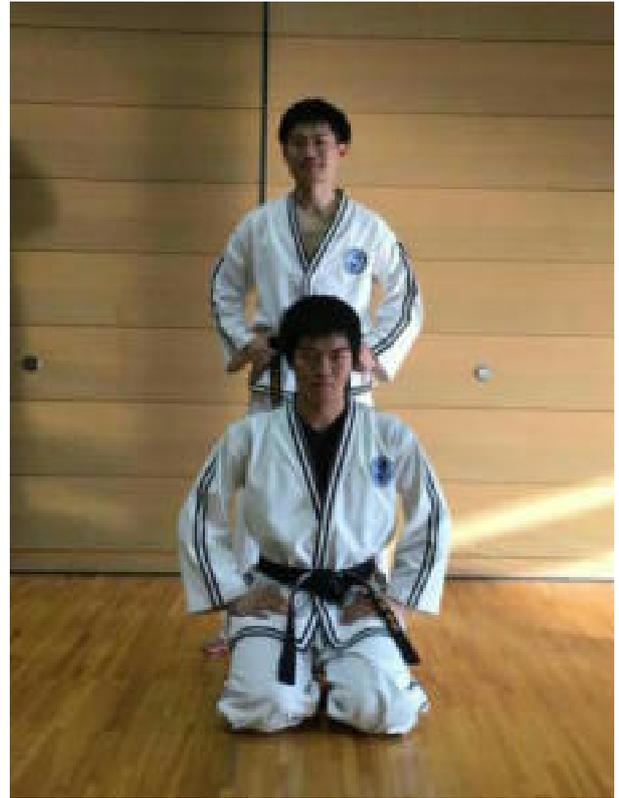


しかも昨年11月、後楽園ホール開催の第28回全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会
B級男子無差別級組手 (フルコンタクト・テコンドー・ルール) の優勝者です。

まさに文武両道といえます。おめでとうございます！

伊藤初段は「将来、小学校の先生になりたい！」という明確な進路に基づき第一志望の国立大学に合格しました。
JTAの少年少女部の皆さん！ 伊藤先輩を模範とし、後に続け！

将来の大学受験で第一志望大学合格を実現したいJTA少年少女会員および保護者は、下記の
河明生宗師範による「伊藤岳陽第一志望合格の教訓と模範」を参考にしてください。



10年間指導の稲熊肇三段及び辻陽介三段と伊藤岳陽

伊藤のコメント

私が愛知教育大学に合格できたのは、テコンドーの中で経験してきた諦めない心のおかげであると思っています。私は幼い時は全く試合では勝てずにいました。しかし、何度負けても諦めず次は勝つと努力を続けるうちに段々と勝てるようになりました。この経験が受験生の時も強く心に響いてました。この経験ができたのも、河明生宗師範や稲熊先生を始めとした多くの人に支え、育てていただいたおかげです。本当に感謝しています。またテコンドーの練習は心だけでなく身体も鍛えられると思います。私はセンター入試前にインフルエンザにかかってしまい実力を発揮できませんでした。週3通っていた JTA テコンドーを週1回にしたため体の調子が狂い病気にかかったからだと思います。今後、大学では体育会テコンドー部を作り、愛知でテコンドーをもっと盛り上げていこうと考えています。



伊藤母のコメント

小学生低学年の頃、護身のために何か武道を習わせたいと思い、テコンドーと出会いました。それまで通っていたサッカーや水泳には身が入っておりませんでした。テコンドーは本当に先生が見せて下さる技は格好良く、惹かれていきました。中学受験勉強時に何か1つ残して、他の習い事を辞めるようにした時、迷わずテコンドーを選びました。中学、高校と多感な時期、反抗期中、父親の海外赴任と重なりましたが、テコンドーが心の支えになっていたかと思えます。母親として助かりました。親の立場で、学校の先生を含め、諸々の習い事の先生方と出会いましたが、テコンドーの先生方は人間的に魅力的な方が多い気が致します。「類は友を呼ぶ」とか、「朱に交われば」ではありませんが、この中で育っていく息子を安心して見守ることができました。大学受験の時も周囲の皆様の暖かい応援を親子共々、感じておりました。高校3年の受験勉強真只中の11月に大会に参加し、複雑な思いでしたが、塾の先生も東京まで観に来て下さり、優勝でき、忘れられない思い出となりました。3月下旬の後期試験まで粘り強くがんばれたのも、最後まであきらめない精神や、本番の集中力等テコンドーで育まれた強さに寄るものと実感しております。この場をおかりして、お礼申し上げます。ありがとうございました。

指導者・稲熊肇三段のコメント

2008年に小学3年生で入門。大高クラブで愛知初の少年部が出来き一期生の募集で入門して来ました。小学生の頃は特別上手い選手でもなく周りの生徒と変わらなくどちらかと言えば無口で言うことを聞かないヤンチャなイメージです。小学6年に塾に通うことになり大高クラブの練習時間と重なることもあり名古屋天白クラブに移動になりました。この頃から本格的に指導することになります。中学の頃から組手で大会に出ると少しづつですが頭角を現し全日本大会で準優勝。また組手だけでなく型も練習し始めてから高校2年で高校生の部で優勝。高校3年では各道場の練習だけでなく辻三段と共に自主練もしていました。その結果、全日本大会では一部B級優勝。全日本大会が終わると受験に集中して見事、現役で国立愛知教育大学に合格。まさに文武両道です。普通の生徒は大会や審査後に練習に来なくなることが多いのですが岳陽は必ず来ます。自分に対して厳しく真面目で1つの事を続けて努力することが出来る人間です。今の気持ちのまま大学生活も勉強、テコンドーを頑張りたいです。小さい頃からの夢だった立派な先生になれるように日々成長してください。

指導者・辻陽介三段のコメント

岳陽は2008年に入門し早10年が経ち、志望大学である国立愛知教育大学に合格し今春より大学生となります。今では全日本大会で優勝するレベルの選手ですが数年前までは大会ではすぐに負けてしまうような選手でした。何度も敗北し、そのたびに誰よりも悔しさに顔を歪ませていたのは印象に残っています。しかし、彼は何度も何度も立ち上がり地方大会で勝利し、遂には全日本大会の覇者にまで上り詰める快挙を成し遂げました。そんな彼の不屈の精神、色々な技を研究する向上心、テコンドーで鍛えた心身を持ってすれば大学の合格など容易いことだと私は確信していました。見事に結果を出し、次の目標に向け早くも活動している姿を見てまだまだ伸びる男だなと密かに思っています。

少年部に対し指導をしている姿は彼が目指す"教師"そのもので、これから始まる大学生活やテコンドーでの更なる修行が一層、岳陽を立派な教師へと導いてくれることと思います。

師弟関係を越え今では良きライバル、戦友である彼には今の教育の在り方に風穴を開けてくれるような熱い男になってくれることを期待しています！

河明生著「伊藤岳陽第一志望大学合格の教訓と模範」

伊藤岳陽の第一志望大学合格は、日本テコンドー協会の少年少女部指導目的第一段階を達成した模範的事例です。

一、はじめに JTA の七大精神＝文武両道

JTA テコンドーを通じて少年少女期に心身を鍛えながら、人間としての根をしっかりとさせること。
これが、JTA 七大精神のいうところの少年少女部の「文武両道」の「武」。

たとえば、「弱い心」の克服。辛抱や我慢できない、感情の起伏が激しい性格、集中力のなさ等々、親による家庭内教育だけでは治らない「弱い心」を治癒することにあります。

そのうえで、涵養された人間力を私生活に応用させる。

少年少女期から青年期に学校に通う目的は学力の向上です。

小学校・中学校・高校は、年相応に求められる知性と教養を高めるためにあります。

従って、少年少女部会員は、JTA 道場で涵養された人間力を学業向上に応用させなければなりません。

かといって学力重視で、運動をまったくしないと、健全な人格を形成することはできません。

そこで少年少女期から JTA テコンドーに入門という選択肢があります。

(運動をまったくしない子供は、インターネットおよびゲームの害毒に侵される可能性が高い。

2018年4月放映のNHKスペシャルによると、日本では年間3万人前後の若者が失踪しています。

スマホを持たせたとたんスマホ依存となり、SNS で誘われるまま家を出て行ってしまった、とのこと)

JTA テコンドーを通じて涵養された人間力を学力の向上に貢献させる。

具体的には、18歳で迎えた1月～3月に平常心で大学受験に挑み、志望大学に合格させる。

これが、JTA 七大精神のいうところの少年少女部の「文武両道」の「文」です。

二、伊藤岳陽の事例の検証

1、「弱い心」の克服と人間力

小学生3年生の頃の伊藤は感情の起伏が激しい子供でしたが、JTA テコンドーを通じて克服し、立派な青年に成長しました（この点については、すでに昨年のトピックスでふれているので割愛します）

多くの子供たちが、プロ野球選手等の「才能がなければ、絶対、なれない職業」に憧れるのとは異なり、地に足がついた目標を立てています。

「小学校の先生になりたい！」という「努力すれば、絶対、なれる職業」の選択です。

この点から見ても、人間力が涵養されていると考えられます。

伊藤は愛知県出身ですので、

愛知県の教育界を支えている愛知教育大学を目指したということも、

何となく名門大学を目指すという子供もよりは大人だったといえそうです。

このたび伊藤は、愛知県の小学校教員になるという夢に一步近づきました。

「努力すれば、絶対、なれる職業」に大いに近づいたということです。

JTA 七大精神には「家族に感謝し孝を心がけること」もあります。

両親にも、第一段階の「孝」を果たしたと考えられます。

また、昨年優勝した全日本 FT 大会に、塾の先生が応援に来てくれたと聞いております。

受験生であるにもかかわらず全日本 FT 大会出場への認め、東京まで応援にかけつけてくれるという優れた塾の先生に出会えたことも幸運だったと言えます。

この先生に対しても、第一志望大学合格という結果をだし、「孝」＝恩返しできたと思われれます。

2、運動はJTA テコンドーのみ。

志望大学に合格したければ体育系部活をしない

伊藤岳陽は、早稲田大学理工学部合格した同期の野原（JTA 佐世保テコンドークラブ）同様、中学・高校と体育系の部活をしておりません。

これは、常日頃から、私・河が主張してきたことです。体育会系の部活は受験にはマイナスだからです。

部活をやらせたくない理由

①野球やサッカー等、朝から晩まで時間を拘束される体育系の部活に専念することは学生の本分ではありません。公立学校の部活の指導者は、そのほとんどが素人です。

また、文部科学省等が実施した教員に対する意識調査でも明らかなように、

「部活の指導は負担である」、と多くの教員が答えています。

その結果、文部科学省は、「部活の時間を減らすこと」を通達しています。

このような部活に、子供や親は何を期待しているのか、まったく意味不明です。

②部活の朝練は、母親の疲労、とりわけ寝不足を惹起します。

毎週毎週の土曜日や日曜日の朝練は、母親の負担が甚大です。

共稼ぎが一般的な状況での寝不足は、ストレスを蓄積します。

その結果、些細なことで夫婦げんかに発展します。

なかには離婚する親もいます。

思春期の子供の前で親がケンカをすると、子供の学力は確実に落ちます。

JTA の体育会部員の中にも、「親同士のケンカで、やる気がなくなった」と回想する者が少なくありません。

③中学生で朝から晩まで部活をやり、名門高校に合格したという事例を見たことがありません。

朝練をやれば寝不足のため昼の授業は寝ており、夕方、激しい練習をすれば塾でも寝ているか、集中できないと

いうのが現実です。この繰り返しで、中学の夏に部活を終えて、高校受験に専念できない子供が多い。

朝から晩までの部活がしみ込んでおり、生活のリズムが狂うからです。

④もう18歳で大人になる世の中です。中1なら6年後、高1なら3年後です。

大人になるためには、できることやできないこと、可能なことと不可能なことを知る必要があります。

つまり諦めることも大人になるための通過儀礼なのです。

過去、JTAにも、せっかく黒帯になり、これからという矢先の中学生入学時、

「プロ野球選手になりたい!」、「プロサッカー選手になりたい!」とかで辞めた子供が約50人程いました。

一人もプロ選手になった者はいません。

学力ものびていません。

プロ選手どころか、ただの一度も公式の試合に出れないという現実が彼らを襲っています。

引退する頃には、コンプレックスのみが残る、というわけです。

これが最大のマイナスです。

ボールを追う、蹴る、投げる、打つ等は、歌や芸術等と同じ才能の世界です。

一流アスリートの親は、当該スポーツの二流か三流です。

自分がかねなかつた夢を成し遂げるため幼少の頃より英才教育を施しており、ものすごい競争社会です。

素人が思いつきや流行に乗せられて太刀打ちできる世界ではありません。

つまりアスリートの世界は、努力しても報われる世界ではないのです。

努力しても報われない体験をした子供が、努力を持続的にすることができるのか、という疑問があります。

大学受験勉強は、持続的な努力が要請されます。

努力すればかならず結果をだせる JTA の大会で入賞を重ねたほうが、

持続的な努力をしていくという習慣を身につけると考えています。

3、リズムが狂いインフルエンザでセンター試験で苦戦

良き運動習慣＝高3でも、JTAテコンドーを行うことにより、生活のリズムを保つ

私は伊藤の自宅に3度、励ましの電話を入れました。見込んでいたからです。
受験を控えた高校3年生で、全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会に出場し、
優勝（男子B級無差別級組手）したのは伊藤のみで、その根性に関心しておりました。

最初の電話は1月の年明け、2度目はセンター入試直前です。

しかし、2度目は、インフルエンザにかかってしまい本人が寝込んでおり、母親に伝言を依頼しました。
「お母さん、だいじょうですよ。岳陽は合格します。私が見込んでいる若者ですから」

インフルエンザにかかったのは、伊藤本人によると

「週3回のテコンドーを週1回にしたから体調管理に失敗した」とのこと。

この是非はともかく、伊藤の生活のリズムが狂ったことは間違いありません。

受験に対する不安もあったと思われます。

伊藤の両親は、JTA テコンドーを続けることにつき反対はしませんでした。休会もしていません。
ただ、世間一般の常識通り、受験に専念するため、家族会議で週1回に減らしたのでしょう。

この事実から我々は教訓を学ぶべきです。

本人がテコンドーを続けたいのに、親が「受験に専念しろ！」と、
強制的に辞めさせる事例が多々ありますが、間違いです。

なぜなら、週1回2時間程度の武道の練習は、受験にマイナスではないからです。

むしろ子供の頃からの良き運動習慣を行うことにより、生活のリズムが保てることでプラスになります。

また、受験勉強が楽しいと思う若者はいません。苦しく、つらく、不安でたまらないはずです。

だからこそ気晴らしは必要不可欠です。

運動を禁止したところで、受験にマイナスなSNS、スマホ等に依存してしまうでしょう。

しかも人間の集中力は、長続きはしません。

朝から晩まで塾に通っていただければ親は安心するでしょうが、集中力は持続せず、実力が伸びると思えません。

週1回程度、子供が好きな運動を許可することで、受験ストレスを発散させる必要があります。

さらに、受験勉強にもとづく脳の疲れは睡眠障害をもたらします。

睡眠障害は受験にはマイナスです。

良い睡眠を保つためには、汗をかいて体を疲れさせる必要性があります。

JTAに少年少女の頃から入門し、昇段している若き門人達は、JTA テコンドーが生活のリズムになっています。

いつもとかわらない道場練習、いつもとかわらない道義姿の先生・先輩・同輩・後輩の存在は、
それだけで受験で疲れた若者の心をなごませます。

子供のころから叩き込まれてきた平常心を呼びもどす確率が高くなります。

（部活にはこれがありません。大学受験期にはすでに引退しているからです）

受験は平常心が大切です。

平常心を保つためにも、高校3年生であったも週1回のJTA道場へ通わせることを推奨します。

4、高い逆境指数。募集僅9名の後期試験挑戦・合格

諦めない打たれ強さ、挑戦する向上心、3度目の正直で実力発揮

私は3度目の電話は伊藤にいれました。センター入試後のことです。

伊藤によると「自己採点で、センター入試はボーダーラインすれすれです」とのこと。

伊藤との会話で、愛知教育大学が二次試験は数学しか実施しないことを初めて知りました。

伊藤は力強い声で

「数学は得意ですのでかならず上位でぶっちぎりで合格します！」

決意を披瀝しました。

センター入試前日、名古屋市でJTA愛知昇段昇級審査会がありましたが、その場に伊藤もいました。

河「伊藤！ 明日、試験だろう？」

伊藤「はい。河宗師範のお話を伺いに来ました！」

河「そうか！ それなら合格間違いなし！」

固い握手をしましたが、合格の連絡はありませんでした。

3月中旬、稲熊から伊藤が合格したというメールを受けました。

後、箱根選抜者合宿に参加した伊藤本人から合格過程を聞きました。

やはりインフルエンザにかかって受けたセンター入試の結果が悪くなく前期試験は不合格だったとのこと。

しかし、伊藤は諦めませんでした。

募集人員僅か9名の後期試験に挑戦したのです。

その結果、伊藤は、見事、合格しました

私が講義する「JTA基礎理論講義」でいうところの高い逆境指数を伊藤が涵養していたのです。

人間の真価は、きつい時、つらい時、困難な時、挫折した時に現れます。

逆境指数は、上記の状況におかれても、なにくそっ、とおのれ自信を奮い立たせて立ち向かう根性です。

伊藤には、これがありました。

伊藤は、「子供の頃、何度も何度も試合で負け、そのことが悔しくて努力した」と回想しています。

負けても負けても挑戦する強い精神性の涵養、これこそがJTAが主催する大会の教育的狙いです。

ゆえに、試合に参加しない少年少女部の教育的効果は低いのです。

試合に持続的に参加することで諦めない打たれ強さと挑戦する向上心が涵養されます。

伊藤には、この精神力が涵養されたと考えられます。

ところが、伊藤によると、後期試験当日、伊藤以外の家族は元気がなかったそうです。なぜなら、後期試験の合格枠が僅か9名と少なく、周りにも後期試験で合格した事例がなかったからです。

しかし、伊藤岳陽だけは、センター入試時の失敗を反省し体調管理十分かつ平常心で実力を発揮。後期試験の面接試験の時には、ほとんど質問されなかったそうです。つまり成績が上位で、文句なしの合格だったと思われれます。

JTAの全日本大会にたとえると、初出場で1回戦負け、2回目は4位で入賞を逃したが、諦めずに精進し、3度目の正直で優勝したと言えるかもしれません。

JTAテコンドーと他の武道との異同は、強くなるだけではなく、

JTAで学んだことを実生活でも応用しなさい！

というものです。

伊藤は、見事にこの成功の法則を実践してくれました。

今後とも、伊藤のような事例が輩出されるでしょう。

文武両道を奨励する日本テコンドー協会の社会的役割と考えています。